

草木音種

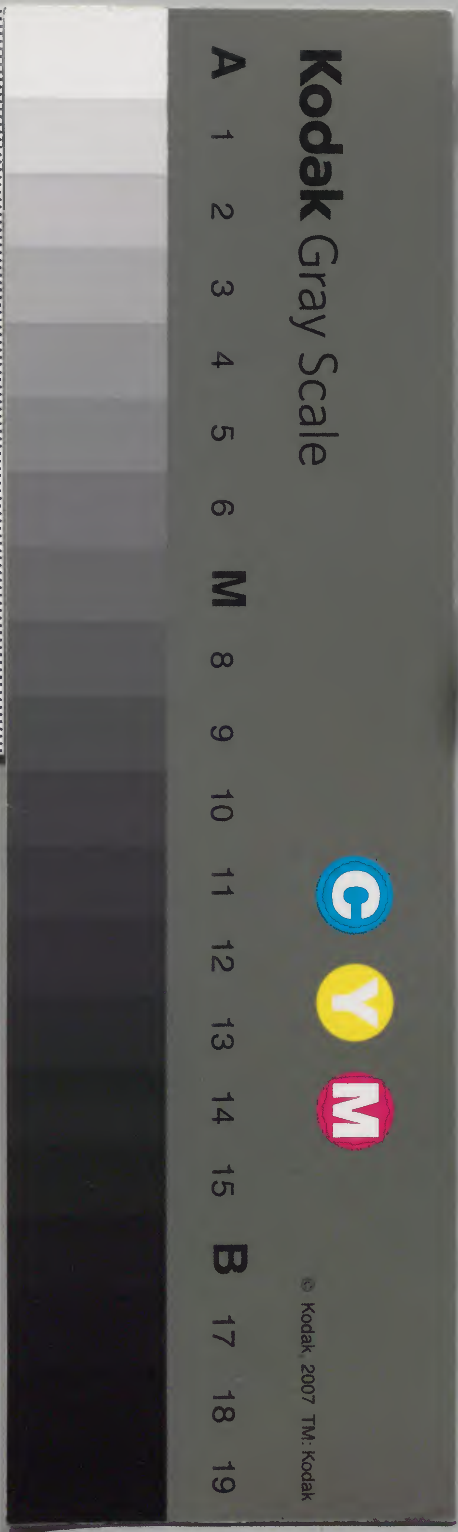
上

内務省圖書
 第...部書
 函...冊
 共四冊

大政官文庫
 和書門
 二六四一
 四九八
 冊架函號

235
 内閣文庫
 二六四一
 八三
 冊架

内閣文庫	
番號	和 11641
冊數	4 (1)
函號	183 235





与程のらむとてはあし一に人きまられり
 形を成をさ記ひらめり終し一のま
 ああ程よくむる程とけり捨るくうり
 母を成めりしす毎みくたてては
 形を成とけりりか程一形を成とけり
 うぬおをらるるもあふとていふはさ力
 常正とて代物一又あし一もあし
 終くとも程をら九もあし一かた

やまあし一もあし一あのをけり一も
 うぬあし一もあし一もあし一もあし
 大は形をさく形をさく形をさく形をさく
 うぬあし一もあし一もあし一もあし
 形ひあし一もあし一もあし一もあし
 ふすあし一もあし一もあし一もあし
 そあし一もあし一もあし一もあし
 十とせり一もあし一もあし一もあし

草大南種傳

此乎及鋤山堅之厚或焚財可苑洪矣非
 培圃資益共至于一介餘種而草木及瓦
 然止性孤隨性無其不無殖友友友為
 紫飛若隨風經山河可渡孤生能榮宗風
 仙蕊生實觸之破氣而散生浮萍隨定暖
 可浮沈片花突出而庭波芽芽世眼百左
 纏子竹籬寄生扶于木液而保生女護得
 雲霧可娘生英孤子世根寄他氣可生狹

史之無手可貼籬壁是皆造化自然之理
 何假人力乎友草木之淑生也瓦瓦瓦
 也瓦人豈得而主之然人為萬物之靈孤
 長難生長能生鬆生換回造化在掌握
 友孤宜其燥濕隨其宅表使冬之順其性
 隨其方交域南北易地人力亦可以奪瓦
 功順其理而隨其性萬不失一氣性嗜本
 學之學種菽之法不求而得之培菽生友

世不如此立言今世厚矣是之不思或親玩其
奇也種偃可及國字以菜也名為草木育
種唯也種菽日用之一物云爾

文化丁丑至日水子又玄堂宏崎當正

漢書



漢書

漢書

草木育種目録

卷之上

序 凡例

草木の徳を考ふる

草木に陰陽ある事

土地の善悪并水之事

草木に吉日凶日并宜を忌との事

下種の事

澆灌并培養の事

接法

きりぎりす たろつぎ あつぎ ちろつぎ 撒つぎ 并圖

草木育種目録

捲附 壓條の事 并 圖

移樹 并 伐木の事

登盆の事 附リ 養花挿瓶の法

除蟲法 并 虫の圖

暑寒風雨霜雪の節公得の事

塘窖塗土垂の事 并 圖

種樹運送の事

卷之下

穀菜果藥品花木類百八十五品手入の法

草木育種凡例

一 草木手入の事ハ。上卷小十四ヶ條を以て。種樹の要用と著す。その阿部小を以てハ不同あり。假令ハ南國ハ予。少少ハ馬。又東西ノ上。予。色。變。味。あり。此。本。邦。と。漢。と。時。節。お。遠。あ。り。予。之。一。茲。小。あ。る。と。如。の。阿。部。ハ。東。都。小。を。以。て。各。時。代。述。を。圖。之。よ。り。考。べ。一

一 凡穀類菜類の内日用の物と云ふ事。次ノ果類菜品草木類。又花美草と賞事と云ふもの。文。字。は。供。ふ。し。の。の。又。手。入。し。州。ノ。予。之。の。極。法。云。々。云。々

一 和名と云て漢名云々。又漢名と云て通稱と云々のあり。

菊牡丹芍藥の類ハ漢名多ク華名少ク又縮國の方云
 多ク。その内通ト呼名多ク華名少ク。又縮國の方云
 名和名漢名多ク。一ニ名を華て同名異物を和名トシ
 一草一本のよ入の事ハ下巻より。その一品不述る所ハ土
 地の善悪時節。種着する年の品本の類ハ接法より。その
 久之除る事多ク。その品本多ク。その類ハ接法より。その
 一類て草木の類幾百と云ふ。其の類ハ一品と云ふ。其の
 入を述る所帳あり。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 類の類ハ大抵同一と云ふ。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 知べし。猶天時の事ハ種樹書群芳譜花鏡等々考べし。

野必大本朝食鑑向井氏庖厨本草の作ありて食物功
 能を審し。宮崎氏農業全書ハ種樹日用の事小詳なり。
 漢土の賈思勰齊民要術ハ民用種樹の法並小飲膳
 食治を備。俞宗本郭橐駝等の種樹書陳技採秘傳花
 鏡の書皆種樹の事を載。其類乃書猶多ク考索べし。
 其等の書亦小く。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 近世秘法と自裁法とを和名と云ふ。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 文小傳注。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 予ハ陋拙文句と和名と云ふ。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その
 かくらん事多ク。其の類ハ一品と云ふ。其の類ハ接法より。その

草木育種卷之上
後京極攝政 良經公 作庭記曰。人の居所其四方に木とて。青統とて。のり。野の水かければ。柳丸本うゑとて。青統の代とて。西小大道ある。狐白糸とて。若を大道とて。若くは。楸七本とて。白糸の代とて。○南前小池ある。狐朱雀とて。若くは。若くは。楸七本とて。本とて。朱雀の代とて。○北後をかく。ある。狐玄武とて。のり。野の

草木育種卷之上

東都 岩崎常正 編録

草木育種とて

後京極攝政 良經公 作庭記曰。人の居所其四方に木とて。青統とて。のり。野の水かければ。柳丸本うゑとて。青統の代とて。西小大道ある。狐白糸とて。若を大道とて。若くは。楸七本とて。白糸の代とて。○南前小池ある。狐朱雀とて。若くは。若くは。楸七本とて。本とて。朱雀の代とて。○北後をかく。ある。狐玄武とて。のり。野の

草木育種卷之上

常正按小和玉篇檢ミナルと訓ミ字鏡小
ナツメト訓ミ爾雅注ニ檢棗と云ふと據リ
二本と云ふと

玄武の代をかくのこたへて四神お應の地と云ふに居ぬる官位
 福祿をまかりて無病長壽なりとの事○秦始皇の書と燒儒
 と云はる樹と種樹の書おそのおへてと勅下をたうと云○佛の
 此の教と云ふ神のあまらうたりと云ふひきる樹と樹とならうと
 云ふ事と人屋むらゐいと云ふ事と云ふ事
 以上作庭記群書類從中收者 ○史記貨
 殖傳言植木之利云安邑千樹棗燕秦千樹栗蜀漢江陵千樹橘
 淮北千樹菽注梓木也陳夏千樹漆齊魯千樹桑麻渭川千樹竹又云
 千畝危甚千畦薑非此其人皆與千戶侯等○大和本草云吾邦
 植テ為民用有益物多シ木ニ則白桐梧桐梓桃杏栗棗橘柑
 金橘茶楮漆桑朴椿山茶楮檳榔柳檉枹數種山椒梔梨榛杉

檜ヒノキ樅マツ羅漢松等也草類則麻苧藍紅花薯蕷油菜紫草茜芋也又
 竹類可植者多シ○按カむらふ其外猶多カ樺シラカバアカカあかカ多く
 植へ北國に多し木堅く材となり又皮を剥く楮の皮を製して
 紙又此皮を灸く能燃兩井水消さる也鷓鴣をきふのは紙火
 把となり用ゆ然六軍用ふと云ふあり

草木に陰陽あり事

種樹書曰麥屬陽故宜乾原稻屬陰故宜水澤と云ふも猶向陽
 に好むは陰溼に好むは陽也法陽を好むは百穀の長たり
 世俗惣て向陽の地を好む陽性也法溼を好むは陰性の草と
 云ふ理と考ふるに似る確云人參は陰地を好む法草の好む

天地の陽氣不勝さるる。故に人參ハ陽虚を補。又地黄ハ陽地
と好とも陽氣不勝さるる。故に陰性ハ卑小傷さるる。寒
陰濕の地不傷めぬ。故に陰虚を補。凡草木ハ陰陽の性
ある事如の如し。

土地の善悪并水地事

周禮考工記曰。橘踰淮而北為枳。南方草木狀曰。嶺南已南無
蕪菁種之則變為芥。孔志約曰。動植形生因方外性。春秋節變
感氣殊功。雖其本土則質同而効異。非干米摘乃物是而時非名
實既爽。寒温多謬用之。凡庶其欺已甚。施之君父。逆莫大焉。
本草序

○土之生物。其成數在五。故草木皆五出。桃花有六出者。必雙
仁。皆能殺人。瑯琊代醉○按ふ。草木ハ地の色鬚とあり。人も血氣盛
と凡ハ毛鬚とあり。光澤あり。血氣衰と凡ハ毛鬚脱落。或ハ白く
光澤なき。草木もかくの如く。地氣肥と凡ハ常より花
さる実の。錯國の名産あるも。其物を去地ハ不應と。且地氣盛
処に生るゆへ食物ハ味よく。藥種ハ効力他凡ハ小産さると遠ハ氣
味稠く。奇効ある。又按ふ。草木ハ地より生るゆへ地品の
考るを肝要なる。夏ハ好むのあり。赤つちハ好むあり。去地
よきものあり。破ふと凡ハのあり。草木各好むハあり。嶺南ハ山幽谷ハ
生る草木ハ陽性なり。清寒なる。亦不多ハ陰地と好む。蕪菁ハ忌む

蘭族族の形は用てよく生長は

○葛西の言は地錦抄云亀井戸辺より葉年陽田川の助防中
土より昔あふゆり小石文うたふ砂まらなるよしふらひつら
べ又云云云の砂の中より砂をきり取きかゝるを砂のまら
たる砂あらはらふ若葉よりまら水佃柑藪あふら加
てり○按に真至中石竹あふゆりむめゆり松梨の類なり又桃
柿をよけ肥ておく生もちを但一鈴之の土はらたまて乾き余
画ふぞお草瓜種より

○八王子の砂地錦抄云国黒辺にもあふあり難司谷五子大
才似の如きなり但一向めなる瓜上を赤め思えたる瓜小石あふ

あふり用也○按に存外又山川より深き細石河の用とす海
河より揚る河の用もべらうと堆けあつて括るものなり

○田土種瓜種田のなる水草と種より肥し瓜種をとり又
自無沼池まで埋て圍りたる下湿地まで泥ふかのの産なるなり
小石まらつてかこまり或へ乾き又ハ煙をきりて土の性質を
ふるひちかきして種をよ林檎あお藤あり又梨桃種をの乾
きより又まんおりの牽牛子まで一こより種をいれはふあふを
合を種が甚し。夏まで乾かす洗ふあ人糞をふくそぐ一又
あめりがあふる瓜水とたよとて何と壘たるなり
○けと土根岩辺は土中より種を摘の根を瓜種ては土とさると

下秧吉日宜成日收日
苗代の日不用とす。世俗皆卯の日を忌む
 辛未 癸酉 壬午 癸未 甲午 甲辰 乙巳 丙午
 丁未 戊申 己酉 己卯 辛酉 己亥 乙未
 挿秧吉日又苗田の日のよ。苗代小苗をいふ。甲子九日めん
 甲子 吉 丑 丁卯 己巳 癸酉 乙亥 丙子 己卯
 庚辰 癸未 甲申 乙酉 乙丑 辛卯 癸巳 乙未
 戊戌 庚子 辛丑 壬寅 癸卯 丙午 戊申 己酉
 癸丑 戊午 己未 庚申 辛酉 癸亥
 不收成日 丙辰 壬辰 辛亥謂之天地不成 乙未謂之
 天地不成 凡播種俱合忌之

種作忌九焦日御所謂拾九焦日ハ拾芥抄の九坎日と同た

- 正辰 二丑 三戌 四未 五卯 六子 七酉 八午
- 九寅 十亥 十一申 十二巳

壠田吉日田を耕ふ 用火日田を耕ふ 為吉謂丙寅丁卯甲戌乙亥之類

壠田忌土鬼有九日田を耕ふ 癸己 甲午 乙酉 辛丑

- 壬寅 己酉 庚戌 丁己 戊午

穀米入倉吉日田を耕ふ 庚午 甲戌 乙亥 丙子 己卯 辛巳

- 壬子 癸未 己酉 戊子 己丑 庚寅 乙未 壬寅

- 癸卯 甲辰 己酉 丙辰 癸亥

田事避忌實録 田祖即神農氏甲寅日死 田主乙己死辛

亥莖 田父丁亥死丁未莖 田母丙戌死丁亥莖 田夫丁亥死辛亥莖 已上並忌開田耕作耕耘 后稷癸死專忌播種

種菜吉日 庚寅 辛卯 壬戌 戊寅

種麥吉日 庚午 辛卯 辛巳 庚戌 庚子 辛卯

種瓜吉日 甲子 己丑 庚子 壬寅 乙卯 辛巳

種麻豆吉日 甲子 乙丑 壬申 丙子 戊寅 壬午

壬寅 芝麻忌西南風 不忌則悉變為草

種樹書曰凡樹木當元日日未出時以斧斑駁推折棗李等樹謂之嫁樹又曰凡果實初熟用雙手摘則年々生果見麝香薰則花不結子又曰果實異常者根下必有毒蛇切不可食又曰花果樹

如曾經孝子及孕婦手折則數年不著花或不甚結子又曰果子先被人盜喫一枚飛禽便來喫凡果木未全熟時摘若熟了即抽過筋脉來歲必不盛又曰凡種好花木其傍須種葱薤之類庶麝香觸也又曰種花葉處栽數株蒜遇麝香則不損又曰鑿果樹納少鍾乳粉則子多且美又樹老以鍾乳末和泥於根上搗去皮抹之彼茂又曰凡種樹宜在望前在望後少實○花鏡曰七月勸地最能殺草○按に播種接樹摺物て諸の草木以極多九焦日見南風火日曆小天火地火と忌といふ○地錦抄云草木之萌は毎月節は日まぐべうとむと暦又せるとある日あり耕作ははせりまゝとて大よさるふ事なり接木さる木と無事たり七伴蒿又入刻刻除

そ除くかみずとどども。一日用たる下

下種は事

按に土の草木の母なり。これ動也の胎と書と同一。母の氣血凝り
さればを子自安し。草木と又然至土地の陰陽と考す。木の陰
陽分ある。子未一あり。陽の百年青くも人の實の日分さうりて
根の辛みあり。又日陰より五穀菜蔬の陽は属するもの多し。中
小も稲の穂は葉の上よりありて陽氣分得て実の。又陽地は種
又木の實を多くするものと○種分より貯るに事あり。夏の
めはあり。秋実のりのである。竹とよく実入る竹先一をきて肉を割て中の核を
下。肉の皮に薄仁の殻に充て硬ければ。夏実のりよりあり。又下

の草をれハ一子分採て試一安は葉を多しハ一穂分ちて試下。た
なき葉を多しと初より採るは採ちてを種いませぬ。熟せる樹ハ種と実

事なり。公燭ハ一実入るればらうて一ある乾て溼せり。紙袋入る
流のつゝあは拭置或ハ葉入貯へ。又ふさうて表は葉のあり。これを

どうまふと云後小見也。○惣て種ハ本種なり。形小なれども氣分
ある中本種にまふれば。友小諸の草木はた子。た分難く數日乾

せどして牛糞ハ一付を離る樹ハ枯るを氣落れと云へ。甘
蔗ハ種分葉少許。法のたた敷ハ乾あして実ハ葉の背におり

あれ下の種分ハ下老に詳なり

○代は事 瓜茄の類と荷ハ先を瓜似之。老ろハ一呼せり

草木育種卷止

少坪のとも。園と掘りてから内の土を耕し細くして之を踏たる藁と厚く敷き上之砂を以て又之を以て灰と人糞と合せし腐したる土一畝を以て之を種瓜をせしむ一ニすなりと云

種瓜を下すは晴天吉日に擇みて土は好より肥一の口の土を以て但し瘦地にあらずる瓜を以て耕し軟ふして種を播種の水田亦まく物ハ土の瓜を以て種長たるに好む瓜は坊あり燕子の死ハ陸に着て後水澤に墜べし蓮葉姑鳥芋膳蓮を以て瓜より瓜小者より烟草ハ種瓜亦小者より種上瓜種つけ種ハ又種瓜種細小なるものハ細き土とまぜてよく之風雨亦勤とかく

奇ぬもめん。又小く種を種瓜にするまであるはひとくあり種瓜トて亦小瓜より種瓜又より種瓜にするものあり惣々本ハ実熟するに自然に落生る理あり。但今ハ菜蔬けハ秋秋着て春夏是れ実のり。收る。夏着のハ秋是れ実のり。收る。何とぞ着付帯に收るハ自然あり。その着といハ種早く枯易きものより人參などハ実紅く熟たる付採とて亦去にまぜる。云の種は乾ぬ加減あり。を焼く種ハ入るに埋め或時種は種を以て種より又草木の内を以て種を種瓜とて種瓜あり。これハ実瓜よりなる付亦地之種を以て種瓜除むるはひとく種瓜を生るあり。○種樹書曰。凡果須候肉爛和核種之。否則不

まじ。尻しつぽより馬うまの踏ふみたる糞ふんと厚あつくを土つちへ入いれて糞ふん

 けとそぎとく。猪ぶたは糞ふんの種こゝろとうねれ下したより温ぬる氣きのなるゆへ

 生なまるも。又また畑はたけへ苗こゝろ殖殖する時ときも。かゝのよしてうねれ。物もの小ちひよりて始はじめ

 け及およびど又また葉はの代かゝりり小馬こま糞ふんは用もちもあり

 ○人糞ひとふん 猪ぶたの草くさ木きは肥こゝろ人糞ひとふんと第一いちとそぎとく。他ほかの肥こゝろ

 小勝よこも。何なにの肥こゝろにもあつてまぜとす。花鏡はなかがみ云い。正月しょうげつ七分糞ふん三分

 水みづ。二月にがつ六分糞ふん四分水みづ。三月さんがつ對たい和わ四月しがつ四分糞ふん六分水みづ。五月ごがつ三分

 糞ふん七分水みづ。八月はちがつ四分糞ふん六分水みづ。九月くがつ對たい十月じゅうがつ六分糞ふん四分水みづ。十一

 月じゅういちがつ七分糞ふん三分水みづ。十二月じゅうにがつ八分糞ふん而して止とす。○地錦抄ぢきんしょう云い。人糞ひとふん一桶ひとく

 水みづ二桶ふたづつ入いれ。五十日ごじゅうにちほどとく。青あおさあのよとく。いさる。時とき用もちとす。

按あにうけ肥こゝろハ雨あめ後ご作しる。若わかくけと雨あめ降ふり。列りく。むす。中なか肥こゝろ

 ちへ入いれる。水みづを少すくし。刻ときたふ。何なにも人糞ひとふんより。腐くさたる。よ。然しかる。を

 今いま倍ばい倍ばい。寒か肥こゝろとそぎ。その本もと何なにふ。そぎ。を。用もち。ハ。よ。よ。よ。一ひと

 出いる。と。中なかハ。替かへ。て。食たべ。る。水みづ。と。ま。暖ぬる氣き。小ちひ。あ。り。て。食たべ。と。水みづ。

 草くさ木き。も。又また。け。の。よ。と。く。あ。る。糞ふん。が。か。い。ま。さ。小ちひ。と。く。眼め。を。食たべ。何なに。ハ。

 此こゝろ。付つ。肥こゝろ。を。用もち。ハ。湯ゆ。を。用もち。る。小ちひ。あ。る。糞ふん。と。か。い。大おほ。抵たい。芽め。を。け。る。最も。よ。用もち。

 弱よわ。さ。草くさ。木き。も。あ。る。小ちひ。あ。る。糞ふん。中なか。強つよ。き。肥こゝろ。と。用もち。ハ。か。く。傷いた。腐くさ。の。の。

 本もと。の。敷し。ハ。よ。又また。極ごく。か。て。速すみ。に。肥こゝろ。を。ま。ぐ。り。あ。り。若わか。用もち。た。く。ハ。肥こゝろ。

 之これ。ま。せ。極ごく。と。す。根ね。づ。ま。て。後のち。肥こゝろ。を。用もち。

 ○人尿せうべん 北きた。松まつ。杉すぎ。比ひ。影かげ。よ。用もち。也なり。よ。く。腐くさ。し。て。用もち。也なり。

 植う。植う。樹じゆ。云い。云い。

草木育種卷上

○草綿子 桑の根と入又緒木の根と入より。又油と搾り

粕も用てよ

○梳頭垢臈

らん又多末乾法根と入より

接法は事并圖

燕居筆記曰接法有六曰身接曰根接曰皮接曰枝接曰壓接曰搭接○農圃四書曰桑二月而接也。有插接有劈接有壓接有搭接。有換接○葉世傑草木子曰植物去皮枯氣在外也。動物敗內死神在中也。○張約齊種花法注云春分和氣盡接不得夏至陽氣盛種不得立春。正月中旬宜接櫻桃木樺徘徊黃薔薇。正月下旬宜接桃梅杏李半支紅臘梅梨棗栗并楊柳紫薔薇二月

上旬可接紫芙蓉綿橙匾橘。已上種接莖於十二月間。沃以糞壤兩

至春時花果自然結實。立秋後可接林檎川海棠黃海棠寒珠轉

身紅視家棠梨葉海棠南海棠。以上接法並要時。將頭與木身皮

對皮骨對骨。用麻皮緊緊纏。上用箬葉寬覆之。如萌出相長。即撒

去箬葉。無有不盛也。○柑橘橙等於根棘上接者易活。○接樹須

取向南隔下者接之。則着子多。○梅樹接桃則脆。桃樹接杏則大

○凡接花木。雖已接活。內有脂力。未全。包生接頭處。切要愛護。如

梅雨浸。其皮必不活。以上種樹書。○按小農政全書。小接板又審る。本邦

小接板多あり。其本よりく何事のよき付接べし。何と九焦

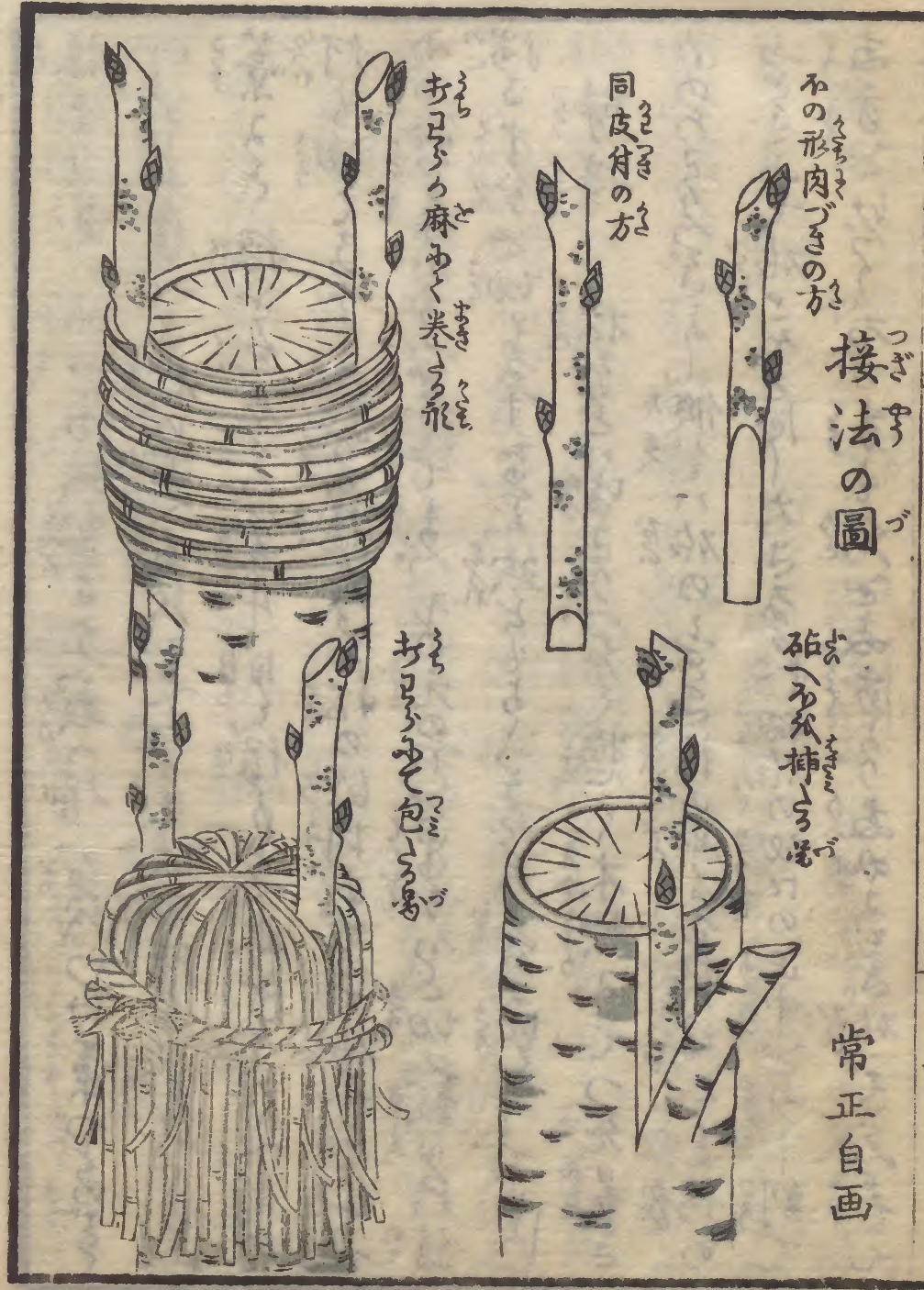
南風天火地火の日。忌下。先其接砧の木。三四歳より六七



身接の圖

高接を漏斗小仕りける圖

根を破りと接する形



木の形肉づきの方

接法の圖

同皮付の方

ちりちり麻ゆき巻する形

ちりちり麻ゆき巻する形

破り穴挿する形

常正自画

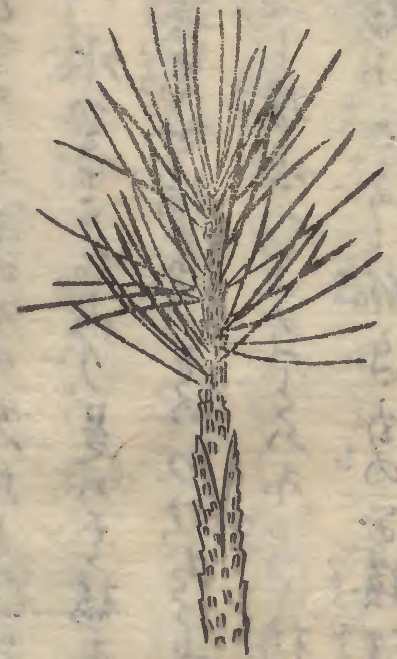
壓接の圖



春接するハ枝ふさうて、
 その方ちやくさうふさう
 つまらうとたえさう小ひ
 めく切らば、二十三日を
 控て、挿るさうを切
 らば、

よびつぎハ親木を移して、極のより、砧へつ、極よ、おろ添木を打て、接せ、さう
 接あり、砧の皮へ切さうとくよ、その方ハさう、接の如く、紐よくらぬせうふ
 削合て接るなり

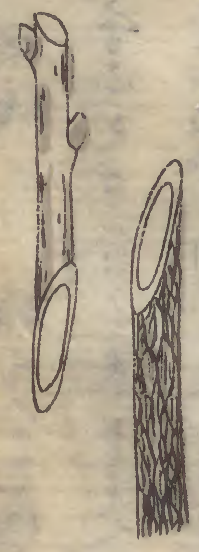
劈接の圖



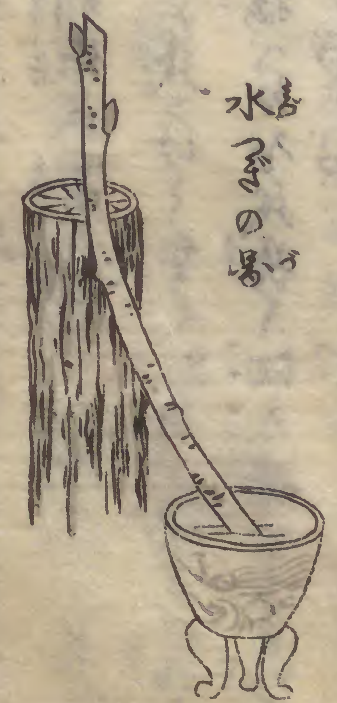
挿接の圖



搭接の圖



水接の圖



○搭接

砧も不毛同ふ事あり。砧とすすよる。又も
すすふ事あり。合く巻き之割竹尻を以て之を
うごかぬやうに。接めども。古紙をけしむ。牡丹を接まはば
○挿接 是れまじり。接べた竹尻長く切丸攪とさる。接
ちくさく。その不の先尻より接の如く。接あり

○水つぎ

其先と接あり。そのしけたる水ハ二日ぐといふ入替てより。右
さし接水つぎる。不毛枯とつた器をたぐひ。水とよび
接ありとす。器とよもの接法あり

○根と砧

根と砧とく接法あり。是れ砧不する木と掘り根の勢

よく皮のむねはる。より。切丸く。さし尻砧の如く。接
あり。大木一本とす。尻砧本數十本と接べし。惣て根
接付へ。ちぐく。器と。古紙の水尻尻から。く接べし。又
器と。木と。但一本あり。外小砧とさる。木と。なけれバ
その木の根と切丸と。砧と。よて接べし。臘梅連翹も。根
より。芽と。多し。さし。ゆへ。帯の砧本の如く。て。ハつた。あり。
根尻砧と。く接べし。

攪 附リ 壓條の事

種樹書云凡種花木須冬至後立春前斫直接。有鶴膝如大母指
者長二尺許札干芋魁中掘令寬調泥漿細切生忌一束攪於泥

二ツよ割玉扱とよあよせむとよふ枝の皮よ疵とつけ。そまら
 の更右の竹灰合く縄おとぎ赤土の芽あるうと肥土をぬ
 まを合せとよぬ極よ竹の内へ入玉けちの乾ぬ申うよ昔とつ
 或ハ小草と極く芽とあはそぐべ。根の生る方と考て竹
 とと。初疵と付る方下の両穴もろも切くは玉又竹を合を
 糸のどくよとて玉。いよく根のよ生る方砂もろと切をほして
 お煎のちくかえくは。又あを枝ととるあ。油の完より枝と
 通液の肉ちよ肥ち灰もあて。右のどく切えもより。又小科
 ぐく或ハ木の根のこふあ枝ととるあ桶とそ玉ち灰合は。
 又あよりて根よとるあ。その木の葉の生ぬまよ根のち灰



壓條の圖

諸木
 疵をつけ埋或ハ竹とより或ハ葉よとを包。下
 掛けハ疵の下の。根を生ずるより

草木ノ種

九

あり根瓜切丸。そ切瓜の上へ水を出し。よく肥する。瓜極む。ハ穀日瓜。種よく芽を出さず。是ハさく木。どう木より丈夫にして。おさ仕方。

移樹之事 附り 伐木事

淮南子曰。夫移樹者。失其陰陽之性。則莫不枯槁。高誘曰。失猶易。○齊三。要術曰。大樹斃之。不斃風。惟則死。又曰。植樹。正月為上時。二月中時。三月為下時。○種樹書曰。凡移樹。不要傷根鬚。須潤塚。不可去土。恐傷根。諺曰。移樹無時。莫教樹知。○又曰。今移樹者。以小牌記取南枝。不若先鑿窟。沃水攪泥。方栽築。令實。不可踏。仍多以木扶之。恐風搖動。其顛則根搖。雖尺許之木。亦不活。根不搖。雖大可活。更茎上無使枝葉繁。則不招風。種一切樹。木枝向南栽。亦向南。凡樹要移。

當三年一樹得拙而枯。然未可下槩論。若以桂為丁。在下釘。則枯。在上磴。則茂。種樹木。用穀調泥漿水。於根下。日沃水。無不活者。凡花木。有直根一條。謂之命根。迹小栽時。便盤了。或以磚石承之。勿令生下。則他日易移。○按小。大和本草。小云。植瓜。ハ宜き。瓜。背。ハつぎ。つぎ。つぎ。も。葉。す。大抵。木。根。之。か。え。る。こ。夏。木。ハ。葉。生。し。ま。さ。出。づ。る。旬。正。二。月。小。宜。秋。葉。落。く。九。十。月。ま。さ。冬。木。ハ。葉。生。ず。よ。か。ま。ま。正。て。後。に。五。月。植。べ。と。い。ふ。木。よ。よ。る。下。大。概。春。の。初。植。う。と。よ。う。と。ま。ま。と。云。り。地。線。扱。小。云。亦。も。又。は。の。と。い。凡。木。を。極。と。ら。ん。得。あり。ま。ま。大。く。り。ち。き。根。あり。ハ。根。を。切。炬。み。く。切。く。よ。し。鋤。ぬ。る。と。よ。て。切。べ。根。の。皮。爛。る。ゆ。植。く。後。と。さ。る。

草木ノ種

九

あり。若年久く居ほさるる大樹ハ根粗く頻少ゆへに公中魚一。三年
 茶河節よれた時根を片に掘切早。枝を切結を二年ゆふ。又片を切也。
 まづその根を細根とせめて後根留てよ。是を轉塚の法としりふ。
 大木ハ枝を多く切くよ。方角の向気遠ぬやうに植る法あれども。
 植るよき向の遠るもあや。一際よきと云が。本気植るふを。
 初より二三すも漬く。植るはゆるよ。初よりゆる植る必傷
 めあり。植る法ハまづ根の形より大きき掘。柔さな根ハ敷共
 之樹とま根の早より細さな根とま。とらわけ。細さ本の
 枝やよつさ。又ななけ。あまそ根の下までちの行こ。て
 中よつさ。水とそぐ下。又右のや細さな根根入。

ありつさる。水と多く流さぬハ瓜ハ根是引入る。是と
 水と云。いんも植る。あふ。そのの丈夫ある木へ植る。樹より竹根
 液。純ふてまると結。む結。竹へ根とつり。竹ハ随分。播
 了。筋遠ぬ。核よ直。結。竹ハ二本。十。也。以。あ
 核よ液と。植て二三年の内。其をと。乾た。何。あ。を。漢。

伐木事

禮記月令。孟春之月禁止伐木。鄰玄注云。為盛徳所在也。 ○周官曰。仲冬斬陽木。
 仲秋斬陰木。○齊民要術曰。伐木四月七月。則不蟲而堅。○花
 鏡云。十二月伐竹木不蛀。○接木。木と切。あ。集。あ。て。林。播。植。
 李の乾。心。二月。以。芽。の。出。ぬ。木。よ。小。枝。ハ。小。芥。或。ハ。籬。の。乾。あ。く。

皮の損せぬ極よ切べし。又鋸やく切らざるは小刀やくけり。切らば
 蠟或ハ毒氣を染みこみ、その上を油紙よく包き蓋し。冬木まで。こい
 か。もちの木。乾ハ二三月に切べし。諸木皆暑中と寒中切ら
 忌。○田舎にて合抱よりある木は切勿。酒と儲と云

登盆の事 附 養花挿瓶の事

按ふ盆栽ハ土乾ぎ溼すよ下ハ水の積るとま一とす。陶盎ぞも
 又花盆ゆと。水枝の穴汗要あり其穴ハ漏斗の如くもあつたり
 るよ。よ。穴の両内ハ引込たる早ハ水滲て悪。穴の両低ガ
 よ。扱完と覆よ。竹の籠器よてもく。ふせく穴と覆
 べ。文蛤るよ鉢あよ。水枝垂るあり。花鏡よ建蘭と挿法

小云。用盆先瓦片填底。後以煉過土覆上。とあれ妙法なり。蘭百兩
 金るよ鉢鉢ハ挿すよ。盆の底の穴と大く。その上を覆よ赤土の
 葉めめ。かきま。たる土灰あくく。なるあり。師よはし
 粗ち灰入て極よ。水よ枝と根腐るあり。物よ。挿すよ合祀と
 切ま。せるもよ。惣と極よ。法ハ。陶盎と下よ。極木の根え灰
 び。ちん。あて。ひ。空。あ。ち。と。入。土。一。置。よ。あり。母。
 希後左右暫動べし。この空虚のふさたあり。極よ一。あ。多。あ。と
 そ。ぎ。或ハ大雨。あ。と。忘。ち。の。か。ま。あ。あ。り。肥。と。娘。ま。ま。ハ。
 年。と。ち。灰。あ。と。入。替。て。よ。又。肥。と。好。あ。ハ。の。乾。め。あ。り。母。先。と。
 と。着。の。極。あ。り。あ。と。和。げ。蓋。よ。移。り。た。り。と。根。と。へ。そ。ぐ。べし。

又鉢植と地よきと久く居つて水抜の穴より蚯蚓升るる
瓶の内ふすじと久く必濕くつひに根腐るるあり。又蕪
熟松の乾ハ棚下のせ
露處置之猶可多延一二日之鮮麗此乃天與人參之力也折花
之法不可亂攀須擇其木之叢雜處取初放有致之枝或一二種
比枝配色不冗不孤稍有畫意者方剪而燻其折處挿之則滋不

養花挿瓶法

秘傳花鏡云凡花滋雨露以生雖瓶養亦當用天落水每日添換
其開廣久若三四日不換花必零落蓋必乾枯每夜宜擇無風有
露處置之猶可多延一二日之鮮麗此乃天與人參之力也折花
之法不可亂攀須擇其木之叢雜處取初放有致之枝或一二種
比枝配色不冗不孤稍有畫意者方剪而燻其折處挿之則滋不

下洩花可耐久蓋有不宜清水養者又不可不察焉如梅花水仙
宜鹽水養而梅更宜醃猪肉汁去油俟冷挿花且瓶不結凍雖細
蓋皆開若貯古瓶中常刺以湯鏗能結子生葉海棠花須束薄荷
葉於折處再以薄荷水浸養細蓋盡開梔子花折處須搥碎以鹽
入瓶中乾挿自能放花抽葉花謝後鹽仍可用牡丹初折即燃其
皮不用水養常以蜜浸自榮謝後蜜仍可用芍藥燒枝後即挿水
瓶中夜間另浸大水缸內早復歸瓶則葉綠花鮮蓮花先用泥塞
其折孔內再以髮纏之先挿入瓶後方灌水夜置無風有露處則
齒齒皆開芙蓉竹枝金鳳花皆當以沸湯養之乘熱即塞瓶口則
花易開而葉不損若蜀葵秋葵芍藥萱花等類宜燒枝挿餘皆不

可燒。凡貯瓶中水。須燒紅瓦片投之。則水不臭。冬月將濃灰汁和酒灌瓶內。則不凍。鮮肉凍汁。養山茶臘梅。則開耐久。如瓶口大者。內置錫管。冬月貯水。不碎瓶。若小口膽瓶等。投硫黃末數錢。亦可免凍之患。○種樹書曰。催花法。用馬糞浸水。前一日澆之。三四日方開者。次日盡開。又曰。冬間花瓶多凍破。以爐灰置瓶中。則不凍。或用硫黃置瓶內。亦得。又曰。芍藥牡丹。摘下燒其柄。插瓶中。後入其柄。以蠟封之。尤妙。○古來菴の挿花氷表の傳書云。河骨のそとの活てん。お目もたむ。先切えと。花茶とも。小水に浸れ。水紙あげたる。毎揚て。油の禁つ。際より。後のお紙。小刀。さく。たら。と。と。おまの。か。う。ふ。紙。し。と。き。づ。き。薄。之。山。椒。う。麝。香。を。お。獲。と。犬。

低く活べし。花の花首へ竹串さし。枝氷氣を通る。又お紙。紙。さ。と。と。よ。若。の。紙。目。の。出。ぬ。内。切。と。根。紙。焼。く。花。首。へ。酒。を。吹。べし。お。と。酒。を。加。く。よ。又。目。井。小。切。と。活。る。ま。ふ。根。を。焼。紙。を。湯。活。べし。一。角。を。う。り。の。お。の。え。竹。の。紙。目。の。出。ぬ。内。切。と。根。紙。を。と。と。切。器。紙。に。紙。粘。り。を。入。る。が。じ。と。と。と。と。入。る。と。も。よ。養。て。は。寒。竹。と。ど。へ。お。ん。養。少。く。勿。端。ま。る。ま。り。氣。條。を。と。へ。水。揚。お。指。と。目。を。お。の。の。る。れ。ど。も。水。紙。液。紙。を。生。け。の。甲。斐。あ。る。ま。ふ。能。く。お。ま。と。本。賊。へ。紙。と。細。さ。竹。串。少。く。紙。着。より。水。を。養。べし。是。を。さ。と。と。目。を。お。ま。る。れ。ど。も。紙。の。の。の。小。ま。一。紙。紙。つ。と。と。と。と。お。か。る。あ。け。あ。る。お。ま。よ。と。傳。書。小。見。也。牛。花。の。お。と。よ。と。と。と。と。若。ま。る。り。相。守。一。因。じ。と。

抄のふ蒼鼠ツクシ青ふ切きく蔓葉つるとも水みづ十分じゅうぶん漬ひ金かね於お活いじ
 たり紙し活いべし。随ま分ぶん冷ひやき水みづより。朔しつ客かくの内うちに持もつるあり。旋ひ花はなの
 活いじと思おも一ひとあふまふ。蔓つるとも切き。水みづ穴あな蓋ふたう大おほ捕とらへ漬ひきよめを
 吸ひきく。朔しつの蒼つむらう活いべし。甚しようと花はなるり。虫むしをきく中なかく
 木き材ざいも持もつ。岡おか河か骨こつの菜さいの花はなの熟じやく。日ひの出いぬ内うち切き。糸いとだくを
 吸ひき。蒼つむらう活いべし。油あぶらと割わく辛から子こ瓜うりぬをきみて活いべし。秋あき海棠たいわうの
 油あぶらの節ふしを。推おめく。らむ志しや。糸いとだくまで水みづよ蒼つむらう活いべし。
 随ま分ぶん漬ひたぐのあふ。若わ紅こう葉えの朔しつ子こ切き。水みづ一本いっぴん通とおの粉こなを
 入いり。蒼つむらう活いべし。秋あきの糸いとだく。於お本ほんの性せいよ。きく。根ね瓜うりを。割わく。本ほん
 通とおと。糸いとだく。糸いとだく。瓜うり吹ふき水みづを。一ひと麻あし。糸いとだく。治ちべし。以上いじょう水みづ蒼つむらうの

あら。瓜うり吹ふき水みづを。一ひと麻あし。糸いとだく。治ちべし。以上いじょう水みづ蒼つむらうの
 切きく。瓜うり吹ふき水みづを。一ひと麻あし。糸いとだく。治ちべし。以上いじょう水みづ蒼つむらうの
 妻さい一ひと索さく考こうべし。竹たける。瓜うり甚しむらう。或ある傳でんよ。治ちべし。以上いじょう水みづ蒼つむらうの
 糸いとだく。治ちべし。以上いじょう水みづ蒼つむらうの

除蟲法 並圖

種樹書曰種木無時戴毛毳於根下皮以甘草末搗之亦佳又曰
 臘月二十四日種楊樹不生喪又曰斫松樹五更初斫倒便削去
 皮則無白蠹又須擇血忌日以斧敲之云今日血忌則白蠹自出
 又曰元日天未明將火把於園中百樹土從頭用水燎過可免百
 蟲食葉之患又曰園圃中四旁種決明草蛇不敢入

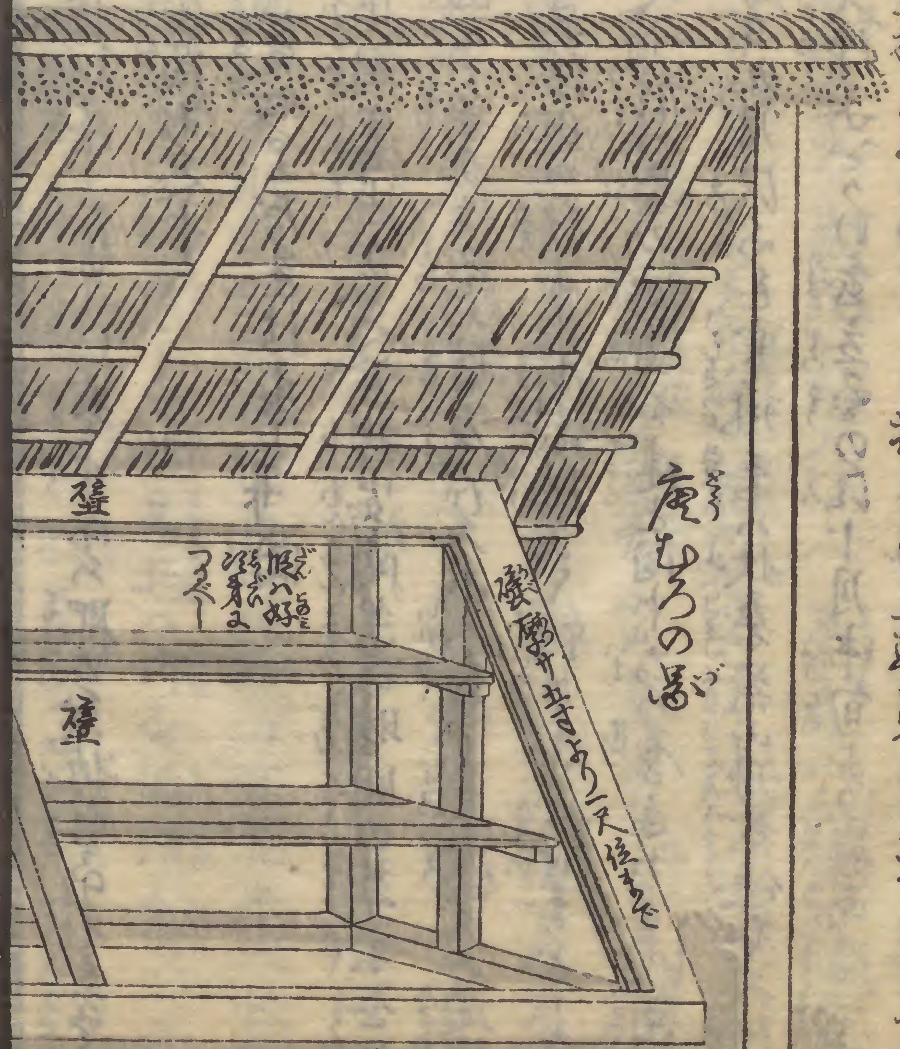
乾の影枝へ卵をうと付く去る。二三日めここの方のいもむしと
 ある。青さりの葉をのりの思さめはあり。生長されば指の大
 さふあり。脊は星ありて眼のとり。○橘裏と云あり。橘柑橙柚
 菜萸椒乾の香ある木より多し。これを蝶飛来り卵を彩枝へ着る。
 是ハ匠大りて蚕の如く。此と狭ハ赤赤色の角と出。其奥一尺
 蠖と法本よせむ。よく見ると指さる。○蚝蟲小種あり梅桃李林檎
 ろの枝に卵を着る。形緩のとり。冬の内を捨べ。卵に
 月にかゝりて虫とあり。木の又へ巢をうけ敷百ありまうて。新葉を
 喰ふ。飛あさむ色みと浮あり。是と法ハ燈油と筆う布に浸
 虫の巢と拭く。又油をた焼く。虫忽死。樹の根めと。

或ハ刻竹の内。又ハ板屏壁ある日陰。線の如く長く産むる
 卵あり。削さる。指と見へ春よりして皆小毛虫と云。此は毛
 多くあり。脊は金色の光あり。秋半夏を帯といふ。枝或ハ樹の皮に
 あり。○又八九月に。桑櫻あり。乾の本又草の葉より色けむる。桑木
 樹裏あり。初ハ蜘蛛の巢の板に見ゆ。葉は冷葉筋とのり。その葉茶
 袋の如く。巢の小る。付枝と切捨べ。捨る。葉よりして虫は飛りて
 下。枯葉の。或ハ中よ寒と暖と。春より。草木の芽出を喰
 又桃梅林檎等の実を食大。害する。○林檎海紅等小種の
 毛虫と生む。二月に一葉葉より。後之て一枝皆蜘蛛の巢の如
 なる。葉は付さる。冷葉筋の小る。付葉は枝を剪てまき捨べ。

蟲の圖

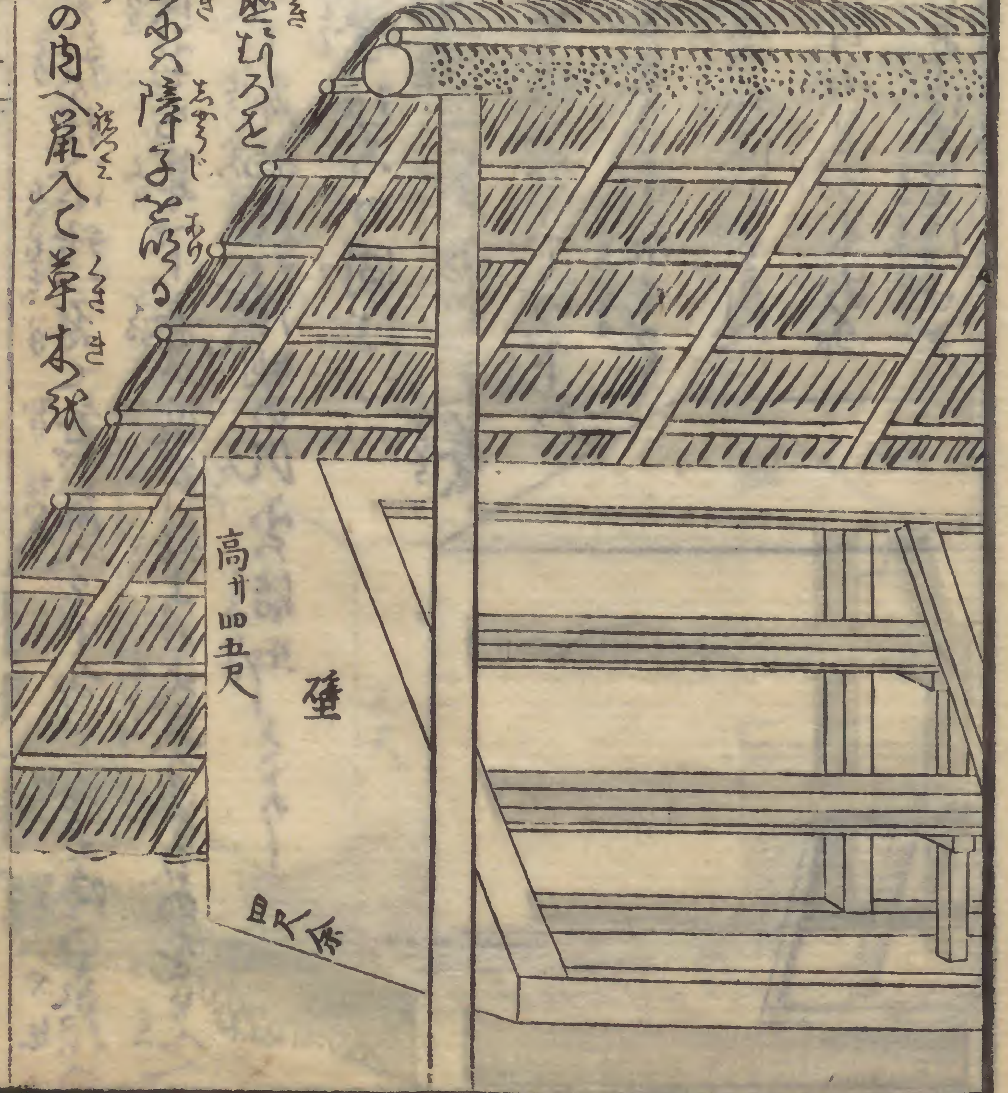


龍舌草 霸王樹の乾を採りて塘の内へ土乾し入る致すかのべ。
 天晴て暖き日
 日ぬ障ふと
 ちぐー日成
 あとよ。然
 どと南風吹
 何の障ふと死
 なること家弁
 の南風入る
 申。家弁又



長サ二尺

曇りたる日
 ちぐー障ふと
 なること家弁
 の南風入る
 申。家弁又



上へ湿むらうとあべい。ひしるく入る大抵三十日程少く晝花開きの
まう。然ども挿の白咲紅挿の色落し。是を暖月小出て日ふあつる
晴へ色を出す多う。又夕方よりむらの内へ入るべし

害は事

あまぐらゝ南向ふ入口風明障子とけあまう。深く五尺下より
一丈むらう。深く挿。むら平みと。又日方へ棚を植挿木を入る
だう。然ども害の湿気多う。け。披桑花山丹花使君子霸王樹
の類の陽氣を好く甚寒ふいしむあへ入るべし。必腐植る
ものあり。こゝと定風を思ふと。陰氣を好れを入るべし。○又
そとけむらとあまう。是のむらから掘をもくあり。たふく挿木と

候と地中を通りまう。その土へ挿の根よ木根海一筆も
あそとけ。くち張うけら。ちの厚けより。あ方ぼてひく
と。夜のむらろあ。度べし。まよ入るお。萬年青石首。ど
又多木乾。まおを入るよ

土藏の事

塗垂と同東西へ長く建皆登はして。入口も窓も皆南向は明
る。障子とけ。夜の戸をまう。是ふ入る草木ハ格別等とも思
がる百両金珠砂根菌の類。その斑入地多木乾と入る。又
土地あへハ蕨の縁の下と掘害あて。又挿木を入る。上の茶根ハ
芽芽へハ瓦あまうよ

